

いのちの未来 シグネチャーパビリオン

黒く湿った岩肌のように見える外壁が、近づくと無数の白い水泡を伴って静かに揺らいでいる——『いのちの未来』石黒浩館は、水を「いのちの象徴」と位置づけた万博シグネチャーパビリオンである。流れ落ちる水と柔らかな膜という、本来は相容れにくい素材どうしの邂逅から、新たな有機的関係を立ち上げてみせた点に、本特別賞ではまず注目したい。

特筆すべきは、PVCの黒い膜の外側に、カーボン繊維による約2mm幅の縦糸・横糸からなるメッシュ膜を重ね、流下する水の波紋形状そのものをデザインの対象として外装化している点である。縦糸は留付け部に密に、その間に疎にピッチを切り替え、横糸は水が分節されて流れ落ちる限界ピッチに調整されている。さらに同一パターンを二重に重ねることでモアレが誘発され、水が止まっているときでさえ揺らぎが立ち現れる。当初の「黒い岩」のようなイメージから出発しながら、柔らかな膜と流水の組み合わせでこれを実現しているところに大きな意外性があり、造形と現象を不可分に結びつけたマテリアル戦略として高く評価したい。

水をテーマに据えたパビリオンの多い真夏の万博会場にあって、本作の優位性は、待ち列空間の外装そのものに膜と水を一体的に取り込んだ点にある。来場者は長い待機時間のあいだ、水音と気化冷却（外気温比 $-5\sim-6^{\circ}\text{C}$ 、表面温度で最大 -26°C ）に包み込まれ、その効果を身体で受け取ることになる。水のスクリーンをかき分けて入るカテナリー形状のエントランスゲートのデザインも秀逸であり、その体験効果を最大化するために構造要素を中央の鋼板耐震壁に集約した建築平面も、合理的かつ効果的である。

短期のパビリオンとしては建築的に造り込みが強い印象も残るが、それは展示内容の充実とあいまって、解体されるのが惜しまれるほどの完成度に達している証でもある。自然と人工をつなぐ膜の可能性を、現象・素材・構法の各層で着実に広げた仕事であり、特別賞にふさわしい。

表彰委員 今井公太郎